

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H05174

研究課題名(和文) ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study on Organizing the Network of Care in the Post-welfare Era

研究代表者

森 明子 (MORI, Akiko)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授

研究者番号：00202359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国家的なものがゆらいでいる現代世界において、ケアはいかに実践されているのか解明しようとするものである。そこで着目したのは、第一に、国家の狭間をゆききしている移民・難民のケア編成、第二に、高齢社会・超高齢社会における高齢者ケアの再編成が、いかになされているかということである。ケアが、国家・市場・住民組織・家族などの異なるセクターをひきよせ、交わらせて、社会インフラを支えていることが明らかになった。ケアのこのような実践から、家族と社会の境界面がくりかえし再編成されていることを読み取ることができる。

研究成果の概要(英文)：The main objective of this research project is to examine how care is practiced in the modern world, where the operation of statehood is changing. First, we investigated how care is organized and arranged for immigrants, refugees, and displaced persons, who are positioned on the boundaries of the state. Second, we explored how care for the aged is reorganized in aged and super-aged societies. The results reveal that care is enacted as social infrastructure across diverse sectors such as the state, markets, civics, and family. The practice of care reveals that the interface of family and society is in the process of being recomposed.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 ケア 家族 市民 国家 市場 共生 民族誌

1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代世界の社会編成という観点からケアに注目し、ケア・ネットワークの編成を人類学研究として解明していく。研究開始当初の背景として4点をあげる。

(1) 人類学の視角

本研究ではケアを、集団を超えてやりとりされるサービスにとらえ、そのやり取り関係に注目する。このようにとらえることで、ケアは人類学の親族論と交換論の延長上で議論することが可能になる。M.ストラザーンは、イングランドで行った初期の調査において、家庭内的なサービスを集団内で充足しきれない場合に、別の集団から提供されるサービスが親族関係を実質化することに注目し、集団間で共有・交換されるサービスをケアと呼んだ。このようなケア概念を介することによって、メラネシアとイングランドを比較することが可能になる。このケア概念から出発すると、福祉は公的な支援として行われるケアとして理解できるし、医療サービスや医療手当ても、そこでやりとりされる複数の種類のサービスのひとつと位置づけられ、福祉国家制度も相対化される。本研究は、このような視角から、ヨーロッパ、アフリカ、アジアのケアをとらえる。

(2) ネットワークへの視点

ケアの実践では、家族、親族、隣人、自治体、社会福祉団体、ケアワーカー市場等、多様なアクターをリンクしていく関係がいかにつくられるかが問題になる。このような関係性をめぐる議論として、B.ラトゥールのアクター・ネットワーク・セオリーが注目される。とりわけ、パストゥールの細菌研究が、公衆衛生学者、都市行政、市民たちをリンクさせることによって成功したことを明らかにしたラトゥールの研究は、そこに関わっているアクターの性格や作用の仕方への着眼で、本研究と共鳴する。本研究は、このような多様なアクターの作り出す関係に注意して、ケアの実践を分析する。

(3) 国内外の研究動向

近年の研究動向としては、ケアの比較研究として行われたふたつの国際プロジェクトが特筆される。一つは、国連の社会開発研究所、ジェンダーと開発部門研究プロジェクトとして行われた「ケアの政治社会経済」(2005-2009)である。都市中間層を対象として、南米・アフリカ・アジア・ヨーロッパの8か国を比較したこの研究は、ケアの4セクターとして、家族・親族、市場、コミュニティ、国家を選び出し、その比重の違いをケア・ダイヤモンドと名づけた図に示した。二つは、EUの第六枠プログラム人類学関連学際プロジェクトとして行われた「親族と社会保障」(2004-2008)で、マックスプランク研究所が中心となって、ヨーロッパ8か国の都市と農村を対象とし、民族誌調査と歴史レビューを行ったものである。本研究は、これらふたつのプロジェクトに連なるものである

が、アクチュアルなケア実践の場面であらわれつつある新たな関係性を、民族誌研究として明らかにしていこうとするところに、前二者とは異なる特徴がある。

(4) 研究代表者のこれまでの研究との関連

本研究の代表者は、これまで「社会的なもの」の編成をテーマとし、科研費研究、共同研究や国際研究集会をとおして、人類学のヨーロッパ研究をすすめるとともに、隣接諸学との対話を重ねてきた。これらの研究を通して、ヨーロッパで産業社会を支えるしくみとして、19世紀末から20世紀半ばにかけて国家を舞台としてつくられた連帯=福祉制度が、1970年前後から綻びをはじめ、再編成を模索しているという理解に達し、その具体的なプロセスを解明することに研究を収斂していった。この問題認識から、国家が連帯を維持しきれない状況で、人々はどうのように相互扶助のしくみをつくり、現在と将来の社会像を構想していくのか、という新たな課題があらわれてきた。そこで、国家の保護領域内と境界領域でのケアの編成/再編を解明し、それを比較の視座から検討する本研究の構想がうまれた。

2. 研究の目的

本研究は、福祉国家制度が見直しを迫られるなかで、ローカルなケアの実践に、国家による制度の限界を乗り越えていく人々の工夫があらわれていることに注目し、それをネットワークの観点から明らかにしようとする。また、そこに携わっている人々は、現在と将来の社会像をいかに構想しているのか、その関係性や組織・制度に焦点をあてて、人類学研究として解明することを目的とする。とくに注目するのは、移民・難民・流民など国家やコミュニティの境界領域におかれた人々のケア編成と、域内における高齢者のケアの再編である。

ケアをめぐってどのような関係があらわれつつあるのか明らかにしていく。それぞれの状況で、家族、親族、隣人、自治体、社会福祉団体、ケアワーカー市場等、多様なアクターが連関する実態を描き出すとともに、そこで「社会的なもの」がどのように編成されつつあるのかを解明する。

3. 研究の方法

本研究は、ケアを実践する多様なアクターに注目し、人、モノ、制度を含めた関係性を明らかにしていこうとするもので、民族誌研究の比較検討からアプローチする。次のふたつの局面に焦点をあてる。1) 国家の保護が十分に及ばない境界域に生きる人々は、どのようにケアを実践しており、そこにはどのようなネットワークが編成されているか、2) 域内の高齢者の生のあり方は、ケアの実践において、既存の福祉・医療制度をどのように再編成しようとしているか。

フィールド地は、ヨーロッパ、アフリカ、

東南アジア、東アジアに設定し、それぞれのフィールドで重層的に存在する文脈とそこでのケアのアクターの相互行為やもつれあう関係に注意を払う。

研究代表者、分担者、連携研究者の各人の担当は以下のとおりである。それぞれがフィールドワークを行ない、その成果を事例研究として比較検討する。

国家の境界域でのケア編成

- ・ドイツ大都市の移民(森)
 - ・東アフリカ難民キャンプ(内藤)
 - ・タイの寺院に住みついた流民(岡部)
 - ・日本に定住したラオス難民(岩佐)
- ポスト福祉国家時代のケア編成
- ・フィンランドの福祉の民営化(高橋)
 - ・ガーナの死者ケア(浜田)
 - ・ラオスの高齢者ケア(岩佐)
 - ・東アジア超高齢社会のケア再編(天田)

また、各研究者のフィールドワークと並行して、本研究の背景や主要概念を社会学のケア研究と比較検討するために、2名の社会学者を招聘してラウンド・テーブル形式の研究集会を開催する(「東アジアにおける家族の境界とケア実践 社会政策のもとでの家族」於国立民族学博物館、2015年10月12日実施)。

さらに、海外研究者を招聘して、コロッキラム形式の国際研究集会を2回開催する。

2017年2月19日

Colloquium “Thinking about care as social organization. A Discussion with T.Thelen and K.Buadaeng.” National Museum of Ethnology, Osaka.

2017年12月9-10日

Colloquium “Thinking about an anthropology of care. A discussion with F.Aulino and J.Danely.” National Museum of Ethnology, Osaka.

議論の場を研究者コミュニティに開くために、日本文化人類学会第51回研究大会で分科会「ケアの実践を通して編成される社会：場所を奪われた人々が生きる場所について」を組織した(2017年5月27日 神戸大学)。

4. 研究成果

(1) 高齢社会・超高齢社会のケア再編成

高齢社会・超高齢社会へとつきすすむヨーロッパと東アジアでは、介護福祉制度の民営化とともに介護市場が進展し、複雑な様相があらわれている。たとえば北欧型福祉国家のフィンランドで、公的ケアサービスの民営化の過程で導入された新技術は、ケアの受け手を顧客へと換えケアワーカーのあいだにコンフリクトをもたらした。介護の市場化は家族関係や生存保障システムを変容させ、道徳をもゆるがしつつある。国家による福祉制度が未熟なガーナなどの国でも、現金経済の浸透がケアの読み替えを引き起こしている様態が明らかになった。

(2) 領土を奪われた人々のケア編成

一方、国家の境界領域におかれている難民や移民は、ホスト社会の支援によって生存のニーズを満たしているが、そのニーズは滞在の長期化にともなって変化していく。たとえば、東アフリカの難民キャンプにおいても、最低限の生存の希求から、よりよく生きるための資源調達へと展開するそのニーズを満たすために、ホストとなる国家や住民(旧住民)と移民・難民(新住民)のあいだには、当初は予想もしていなかった関係性があらわれつつあることが明らかになった。さらに、こうした局面に宗教が関与する様態も、タイの寺院に住みついた流民の調査で明らかになった。

(3) ケアの生まれる場

調査で得たデータの比較検討から、ケアが国家や家族や市場などの異なるセクターをひきよせ、交わらせて、社会のインフラを支えている局面が浮かび上がってきた。

それは、国家的なものがゆらいでいること、制度の隙間があらわれてきていること、家族が変容し再編成されつつあることを映し出している。ケアを人類学の視点からとらえ、民族誌として記述することは、この局面を現在進行中の生きた状況として記述することである。ケアは国家と家族、グローバル経済とローカルな市場、市民道徳と消費者行動、宗教と個人が交錯する動態的な局面において重要な役割を果たしていることが明らかになった。

(4) 境界面の編成

このことは、ケアの発動は、公的/私的、国家/家族、公共/市場という対立概念では理解できないことを意味している。国家と家族と市場が協力関係を結んでケアを実現していく局面があらわれている。それらが重層しながらズレていること、どちらにも関わりながら完全には一致しないことが、ケアを発動させている。その隙間を埋めるために、どのようにケアが編成されているかに注意を向けること、そこにケアを人類学が研究することの意味があると思われる。

ケアを介して、家族は社会と対峙しており、家族と社会の境界面が不断に編成をつづける動態がみえてくる。このようなケアへの視線は、従来の人類学の思考が、さまざまな二項対立に囲まれていたのに対し、それを克服し、新たな関係性から社会をとらえていく可能性をもつといえるだろう。

(5) 海外研究者との研究協力

本研究は、海外研究協力者との議論を重ねながら展開した。その一部は、研究方法の項で述べたように、国際研究集会の開催という形で行われた。意見交換は継続的に行われていて、年を追うごとに発展している。研究期間終了後になるが、2018年7月に開催されるIUAES 国際研究大会(ブラジル、フローリア

ノポリス)で、研究代表者森とT.Thelen(ウイーン大学教授、海外研究協力者)がConvenerとなってCare Encountersというパネル(Open Panel)を構成し、研究代表者、分担者、研究協力者が研究発表を行うことが決定している。

(6) 今後の展開

本研究は、ケアの人類学の可能性として、ケアの生まれる場、境界面の編成というキーワードを引き出すところまで到達した。この到達を民族誌記述として形に示していくことが当面の課題で、現在その準備をすすめてつある。研究協力者による論文も含めた論文集としてまとめて2018年度内に刊行することを目指している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計26件)

岡部 真由美、宗教をとおした場所とつながりの創出：タイ北部における都市寺院の調査研究より、中京大学現代社会学部紀要、査読無、通巻62号、2018、61-98

森 明子、社会的なものをいかに描くか ケアが発動する場所への関心、民博通信、査読無、157巻、2017、4-9
DOI: 10.15021/00008475

内藤 直樹、「桃源郷」の向こう側：徳島県つるぎ町の傾斜地農耕、バイオストーリー、査読有、25巻、2016、72-75

天田 城介、無届施設のリアルが投げかけるもの 超高齢化/人口減少社会における社会構想、現代思想、査読無、44-3巻、2016、70-79

[学会発表](計38件)

森 明子、ケアの実践を通して編成される社会：場所を奪われた人々が生きる場所について(分科会趣旨)、日本文化人類学会第51回研究大会、2017

森 明子、ネイバーフッドの可能性：ベルリン街区におけるケアの発動について、日本文化人類学会第51回研究大会、2017

内藤 直樹、「戦争」のなかで生み出される社会：東アフリカ諸国の難民キャンプにおけるケア・ネットワークの諸相、日本文化人類学会第51回研究大会、2017

岡部 真由美、都市に生きる流民の場所：タイ北部における仏教寺院内スクウォッターから考える社会編成、日本文化人類学会第51回研究大会、2017

Takahashi, Erika, Generations, social order and old age, Association of Anthropology, Gerontology and the Life Course, inter-congress, 2017

高橋 絵里香、最適化されたケア：北欧型福祉国家と組織・顧客・民営化、日本文化人類学会第51回研究大会、2017

森 明子、ケア概念の可能性 社会的なもの民族誌のために、日本文化人類学会第50回研究大会、2016

内藤 直樹、研究成果の社会実装：地域の防災・減災活動とフィールド教育の融合、日本冰雪学会、2016

Takahashi, Erika, Professionally related: the consequence of re-establishing informal care in rural Finland, EASA (European Association of Social Anthropologists) 2016 biennial conference, 2016

Takahashi, Erika, Redefining the boundary between care/work: the rise of the relative care support in Finland, IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) inter-congress, 2016

浜田 明範、集める：ガーナ南部における社会的なものの部分的つながり、日本文化人類学会第50回研究大会、2016

天田 城介、境界に立つ研究者たちの研究倫理をめぐる葛藤と構造的ジレンマ(学会企画シンポジウム「人文社会科学系の研究倫理」)第27回日本生命倫理学会年次大会(招待講演)、2015

高橋 絵里香、入居者決定のホリズム 福祉国家再編期のフィンランドにみる施設介護の分配、日本文化人類学会第49回研究大会、2015

Okabe, Mayumi, The 'Development' led by a Buddhist Monk and the Reconstruction of Religious Practices in the Thai/Burma Border Area of Northern Thailand: A Preliminary Analysis of the Revival of the 'Chula Kathin' Ceremony, The 2015 IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) inter-congress, 2015

岩佐 光弘、マゴ育てと老親扶養：ラオス低地農村部における高齢期の新たな役割とケアの価値の変化（分科会「東南アジアにおける高齢者の「新たな暮らし」とケアの規範と価値の変容」、代表：岩佐光弘）、日本文化人類学会第49回研究大会、2015

浜田 明範、再分配研究の再始動：行為から集団の生成を考える、日本文化人類学会第49回研究大会、2015

〔図書〕(計8件)

Okabe, Mayumi, Silkworm Books, In TANABE, Shigeharu (ed.) Communities of Potential: Social Assemblages in Thailand and Beyond (“Making Sense of a Buddhist Monks Network as a Community Movement in Contemporary Thailand”), 2016, 258(211-229)

天田 城介、青弓社、天田城介・渡辺克典編『大震災の生存学』(「数え上げの生存学に向けて 福島第一原発事故をめぐる高齢者たちの生存」)、2015、224(103-119)

岩佐 光弘、世界思想社、浮ヶ谷幸代編『苦悩とケアの人類学：サファリングは創造性の源泉になりうるか?』(「ラオス低地農村部の看取りの現場におけるケアの連鎖：子どもの現場への関わりに注目して」)、2015、334(226-252)

〔その他〕

国際研究集会(計2件)

2017年2月

Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng.”

2017年12月

Colloquium “Thinking about an anthropology of care: A discussion with F. Aulino and J. Danely.”

ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/15H05174>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 明子(MORI, Akiko)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授

研究者番号：00202359

(2) 研究分担者

天田 城介(AMADA, Jyosuke)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：70328988

内藤 直樹(NAITO, Naoki)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部・准教授

研究者番号：70467421

高橋 絵里香(TAKAHASHI, Erika)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：90706912

岡部 真由美(OKABE, Mayumi)

中央大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：40595477

(3) 連携研究者

岩佐 光広(IWASA, Mitsuhiro)

高知大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20549670

浜田 明範(HAMADA, Akinori)

関西大学・社会学部社会学科・社会システムデザイン専攻・准教授

研究者番号：30707253

(4) 研究協力者

THELEN, Tatjana

University of Vienna, Department of Social and Cultural Anthropology, Professor

BUADAENG, Kwanchewan

Chiang Mai University, Department of Sociology-Anthropology of Faculty of Social Sciences, Lecturer

AULINO, Felicity

University of Massachusetts Amherst, Department of Anthropology, Assistant Professor

DANELY, Jason

Oxford Brookes University, Department of Social Sciences, Senior Lecturer